

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00889

研究課題名(和文) 定型言語としての句動詞の第二言語習得・処理・産出及びその体系的指導について

研究課題名(英文) L2 acquisition, processing, and production of phrasal verbs as formal language and its systematic teaching

研究代表者

奥脇 奈津美 (Okuwaki, Natsumi)

津田塾大学・総合政策学部・教授

研究者番号：60363884

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：句動詞のL2理解と使用について、嗜好テスト、翻訳テスト、ライティングを通して調査した結果、先行研究が示すような句動詞の一般的な回避、特に習熟度の低い学習者における回避現象が示された。また、5ヶ月間の英語圏への留学を通じて幅広い言語経験を積むことで、学習者のL2語彙の受容的側面は大きく向上するものの、産出的側面には大きな変化が期待できないことが明らかになった。この結果から、L2学習者が語彙や句動詞を含む定型連語の多面的な学習を意図的に行う必要性があり、L2学習においては、レジスタ一、低頻度語彙、アカデミック語彙への意識を高め、それらを意図的に学習することが不可欠であることを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第二言語習得の分野において、学習者の句動詞使用の回避に関する実証的データを提供するものである。また、言語の重要な側面でありながら理解や使用が難しい句動詞について、またこれを含む定型言語一般について、それに焦点をおいた意図的な語彙教育の重要性を示しているという点は、言語教育の方法論に重要な示唆となっている。受容的言語能力と産出的言語能力の両方を育成するバランスの取れたアプローチを提唱しながら、句動詞を含む定型連語を意図的に学習する必要性を提起することは、より高い習熟度を目指す学習者にとって特に有益であり、また言語教育者にとっても重要な教育指針となり得る。

研究成果の概要(英文)：L2 comprehension and use of phrasal verbs was investigated through preference tests, translation tests, and writing, and the results showed the general avoidance of phrasal verbs as highlighted in prior studies, especially for learners with a lower proficiency. In addition, it was found that while learners' receptive aspects of L2 vocabulary are greatly enhanced by gaining extensive language experience through five months of study abroad in an English-speaking country, no significant changes in the productive aspects can be expected. Based on these results, I proposed that there is a need for L2 learners to intentionally study multiple aspects of vocabulary and formulaic sequences including phrasal verbs, and that in L2 learning it is essential for them to increase awareness of register, low-frequency vocabulary, and academic vocabulary and to learn them intentionally.

研究分野：第二言語習得、英語教育、語彙習得

キーワード：句動詞 定型連語 語彙習得 回避

1. 研究開始当初の背景

- (1) 近年のコンピュータ技術の発展が大規模な言語データの構築を可能にし、それを利用した言語研究が広く進められるようになり、実際の言語運用の多くの部分が繰り返し現れる語の並びから成る定型的な表現によって占められることが明らかになっていた。母語話者の言語運用に言語の定型性がみられるとの認識は以前から共有されていたが、2000年代になって、Wray (2002) が定型性を言語の一つの特性として捉え、体系的な議論を行ったことで、定型言語が研究対象として注目されるようになっていた。
- (2) コーパスを利用した研究に加え、心理言語学的手法を利用してメンタルレキシコンにおける処理(認知と産出)に光を当てる研究も広くなされるようになっていたが、多くの研究が、母語話者による言語産出や処理を対象にしており、L2に関する研究はまだ限られていた。その中でも、句動詞の定型性に着目した習得研究は少なかった。
- (3) 言語理解を容易にし、産出時の負荷を軽減し、自然で流暢な運用につながる定型言語は、研究領域としてはまだ確立されたばかりであり、さまざまな言語領域にまたがった多様なアプローチによる研究が必要とされていた。

2. 研究の目的

- (1) ひと固まりとして記憶に蓄積される(される必要のある)定型言語の習得、認知、産出について、多角的にデータ収集し、L2における習得の難しさの原因を特定し、その体系的習得・教授の必要性とその方法について提示すること。
- (2) 特に句動詞に着目し、その統語的・意味的特徴についての言語的分析を行いながら、L2習得における定型言語の重要性を明確にし、言語教育の中でそれを体系的に指導して習得を促していくことが自然な言語運用のためには必要不可欠であることを示すこと。

2. 研究の方法

- (1) 2019年度に以下4点について理論的研究を行なった。
 - ・ 定型言語に関する理論的背景とその有用性
 - ・ 句動詞の統語的・意味的特徴に関する言語的研究
 - ・ 句動詞使用についてのコーパス研究(母語話者・L2学習者)の文献調査
 - ・ 定型言語のL2習得と言語処理に関する先行研究
- (2) 2020年度～2022年度秋に以下の調査を通してデータ収集と分析を行なった。
 - ・ L2言語知識としてどの程度習得されるのか、句動詞の回避傾向の有無の検証(嗜好タスク、翻訳タスク、多肢選択タスク、ライティング)
 - ・ 句動詞のL2習得に影響する要因の特定
 - ・ 英語圏へ長期の留学をした学習者の語彙知識の変化やライティングにおける定型言語の使用に関するデータを再分析
- (3) 2022年度秋～2023年度に言語教育への応用・提案まで行った。
 - ・ 教授の必要性と方法についての検討
 - ・ 学習者の発達段階に合わせた指導のあり方
 - ・ 難しさの要因(統語・意味的複雑性、頻度、第一言語)を考慮した指導について

4. 研究成果

- (1) 学習者が句動詞と同等の意味を持つ一語動詞のどちらを理解レベルにおいて選択するのか明らかにするために、英語を学ぶ日本人大学生30名に対し、多肢選択テストと翻訳テストを実施した。多肢選択テストでは、学習者に、句動詞(例: *sort out*)と一語動詞(例: *solve*)の両方が通用する文脈で、どちらを選ぶかを聞いた。その結果、句動詞を選んだ割合は42%であったのに対し、一語動詞を選んだ割合は58%であった。t検定の結果、句動詞と一語動詞に対する回答には有意差があり($t(29)=3.65, p<.01$) 学習者は句動詞よりも一語動詞を

一般的に好むことを示した。これは、句動詞の回避傾向を示すものであると考える。また、習熟度による違いもみられた。

- (2) 句動詞の回避傾向をさらに調べるために、学習者の産出レベルでの使用状況を調査し、70名の大学生が書いたL2英語のライティングデータを収集して句動詞の使用頻度を分析した。その結果、全体での定型言語使用数881回のうち句動詞は13回のみであることがわかり、産出データからは、学習者は自発的な産出で句動詞をほとんど使わないことがわかった。また、習熟度が句動詞の使用にあまり影響しないことも明らかになった。これは、習熟度が上がっても、学習者は定型連語を限定的にしか使用できず、そのL2発達は遅いということを示している。
- (3) L2習熟度が句動詞の嗜好・回避に及ぼす影響については、理解レベルにおいては、習熟度がより高い学習者は句動詞をより好み(句動詞:53%、一語動詞:47%)、より低い学習者は一語動詞の方を好むことがわかった(句動詞:45%、一語動詞:55%)。つまり、習熟度が上がるにつれて、L2インプットや使用経験を豊富に得ることで、学習者は句動詞を徐々に好むようになるのだと思われる。一方、句動詞の産出は依然として難しく、習熟度の向上に伴って増えるものではないこともわかった(上記(2)を参照)。
- (4) 句動詞のタイプが回避現象に影響があるかもしれないことも示唆された。翻訳テストでは動詞のタイプに関係なく句動詞を避ける傾向があったが、多肢選択テストではタイプによって明確な違いがみられた。句動詞が自動詞であるの場合、参加者は句動詞(39%)よりも一語動詞(61%)を選んだが、他動詞である場合はその逆であった。この差は統計的に有意ではなかったが($t(29)=0.47$, $p=.08$)、句動詞のタイプが学習者の選択に一定の役割を果たす可能性があるということが考えられる。これは、他動詞としての句動詞の助詞には動詞の直接目的語の後ろの位置に移動することができるという特徴があり(例: *She switched the light on*)、その構文のバリエーションがあるおかげで、学習者にとっては構文の学習がしやすくなるのではないかと提案した。
- (5) 英語圏へ5か月間留学した8名の日本人大学生について、留学前と後における英語力の変化を調査したところ、語彙知識の広さや深さがともに向上し、ライティングの流暢性も増すことがわかったが、英文エッセイで使用した語彙の多様性、アカデミック語彙や定型連語の使用頻度には大きな変化がなく、英文エッセイの評価スコアも上昇していないことが明らかになった。留学で言語経験を豊富に得ることで、言語能力の受容的な側面は大きく向上する可能性がある一方、産出的な側面においては、半年間という期間では大きな変化を期待することは難しいということが示された。留学中においても、レジスターを意識した学習、また、低頻度の語彙、アカデミック語彙、定型連語への意識を高め、その意図的学習も不可欠であることを提案した。
- (6) 定型言語は言語使用において広く使用され、コミュニケーションにおいて効果的に働くが、それを豊富に使用することは上級レベルの学習者にとっても容易なことではなく、その発達には多くの時間と経験を要することがわかった。したがって、定型言語は、L2教育において、特に体系的な教授と学習を必要とする項目であると示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 奥脇 奈津美	4. 巻 1
2. 論文標題 Avoidance of Phrasal Verbs by Japanese Learners of English	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要 50 号	6. 最初と最後の頁 145-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20713/celes.50.0_145	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥脇 奈津美
2. 発表標題 英語圏留学を通じた語彙知識やライティング力の変化
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会第45回オンライン研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥脇奈津美
2. 発表標題 日本人英語学習者による句動詞の産出と理解
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会第44回オンライン研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥脇奈津美
2. 発表標題 アカデミックライティングにおける定型言語の使用とその特定方法について
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------